修士論文(要旨)
2010 年 1 月

ぼかし表現「かもしれない」「かも」について

指導　佐々木倫子　教授

国際学研究科
言語教育専攻
208J4017
許　允瑄

目次

第1章　研究の背景と目的……1
1.1 研究背景……1
1.2 研究目的……2

第2章　先行研究……3
2.1 ぼかし表現とあいまい表現……3
2.2 「かもしれない」に関する先行研究……4
2.2.1 「かもしれない」の基本的な意味……4
2.2.2 婉曲表現としての「かもしれない」「かも」……4
2.3 ぼかし表現「かもしれない」「かも」に関する本研究の立場……6

第3章　調査方法……8
3.1 データの概要……8
3.1.1 メディア言葉……8
3.1.2 ブログ文体……9
3.2 データ分類の枠組み……10
3.3 データ分類の結果……10

第4章　分析1. メディア言葉……17
4.1 「かもしれない」……17
4.2 「かも」……23
4.3 まとめ……30

第5章　分析2. ブログ文体……34
5.1 「かもしれない」……34
5.2 「かも」……34
5.3 まとめ……41

第6章　考察と今後の課題……43
6.1 メディア言葉とブログ文体での「かもしれない」と「かも」……43
6.2 メディア言葉「かもしれない」「かも」の年齢・性別の使用頻度……44
6.3 まとめと今後の課題……46

参考文献・用例出典
添付資料(1・2・3・4)

要旨

本研究は、従来は推量・婉曲表現として研究されてきた「かもしれない」について、ぼかし表現として使用された「かもしれない」と「かも」をマス・メディアとインターネットのブログからデータを収集し、分析・考察したものである。

本研究で使用したデータは、まず、メディア言葉の場合、2006 年 6 月 1 日から 6 月 30 日まで、2008 年 10 月 18 日から 2009 年 10 月 10 日までのテレビ番組から収集したデータを文字化したもので、計 97 件である。次に、ブログ文体は、2008 年 12 月 25 日から 2009 年 10 月 16 日までの芸能人のブログ(計 8 人)から収集したもので、計 120 件である。収集したデータを「推量」「婉曲」「ぼかし」の 3 つの意味に分類するために、ぼかし表現の判断基準を①主語の人称 ②命題の性質 ③命題が行われた時点 ④会話の場面の性質といった 4 つの項目を挙げ、筆者と第二判定者の判断の下に分類した上で、ぼかし表現のみを分析対象とした。

分析の結果、メディア言葉でのぼかし表現「かもしれない」と「かも」は、「自分に関わることについて述べる」場合と「人や物について述べる」場合に見られた。まず、「自分に関わることについて述べる」場合は、自分を守るために使われることが多く、「かもしれない」と「かも」を用いることで、自己防衛の役割を果たしているようであった。次に、「人や物について述べる」場合は、命題を客観化させ、相手に判断を委ねることで、その責任から逃れられるために「かもしれない」と「かも」を用いていた。それから、メディア言葉でのぼかし表現「かもしれない」と「かも」は、形式上、「かもしれない」と「かも」の後に、文末詞も、文と文を繋げるための接続詞も現われることが少なく、その傾向は「かも」のほうが強い特徴が見られた。

それに対し、ブログ文体の「かもしれない」と「かも」は、「自分に関わることについて述べる」場合と「ある物や物事に対しての感想や意見を表わす」の 2 つの場合に現われた。まず、「自分に関わることについて述べる」場合は、自分のことを客観的に振り返って思ったことや感じたことを述べることで、自分を第三者のように仕立てることができ、外側から客観的に観察しているかのように表現することができる。次に「ある物や物事に対しての感想や意見を表わす」場合は、宣伝や告知する時に「かも」を使用することで、読み手に押し付けがましい印象を与えない役割が期待された。それから、ブログ文体での「かもしれない」と「かも」は、メディア言葉の特徴と同様、「かもしれない」と「かも」の後に文末詞が付かないことが多く、「かもしれない」と「かも」の直後に絵文字がつくことが多いという形式上の特徴が見られた。

最後に、メディア言葉のデータを取り上げ、年齢差・性差を明らかにした結果、ぼかし表現「かもしれない」は、20 代を中心にその使用が見られ、また男女ともに使う表現であることが分かった。それに対し、ぼかし表現「かも」は、「かもしれない」と同じく、20 代から 30 代までの若い世代を中心に多くの使用が見られたが、「かもしれない」より幅広い年代で使われていたことが特徴であった。また、「かも」の場合、男性より女性の使用が目立ったことと、女性の振る舞いに近づけようとするニューハーフの人も使用していたことから、ぼかし表現「かも」は女性に好まれる表現であることが明らかとなった。

今後の課題として、「かもしれない」「かも」を生の日常会話からの聞き書きを資料として、再度考察を試みることと、「かもしれない」「かも」の他にぼかし表現として使われた文末詞を取り上げ、調査してみたい。

参考文献

〔日本語〕

麻生夕美(2002)「推量表現『かもしれない』が婉曲表現として使用される際の機能分類について ―日本語教育の立場から―」『北條淳子教授古稀記念論集』 早稲田大学日本語研究教育センター初級教科書研究会 pp. 1-12

宇佐美まゆみ「改訂版:基本的な文字化の規則(Basic Transcription System for JapaneseBTSJ) 2007 年 3 月 31 日」

岡本真一郎(2007)「ブログの心理学的特徴」『日本語学』 第 26 巻 第 4 号 明治書院 pp. 4-15

Kekidze Tatiana(2003)「現代日本語の非断定的表現 ―「そうだ」、「げ」、「っぽい」を中心に―」(日本言語文化専攻)国言博第 7 号 pp. 293-305

黄鈺涵(コウギョクカン)(2006)「「かもしれない」の婉曲表現としての機能分類について」『日本語教育研究』言語文化研究所 pp. 59-67

陣内正敬(2006)「ぼかし表現の二面性―近づかない配慮と近づく配慮―」『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所 pp. 115-131

杉村泰(2004)「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」『名古屋大学言語文化論集』 第 25 巻第2号 pp. 99-111

鈴木みどり(2001)『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社

築島謙三(1977)「曖昧の考察」『成城文芸』80

中山治(1988)『「ぼかし」の心理―人見知り親和型文化と日本人―』創元社

永田友市(1992)「婉曲表現」『表現研究』 第 55 号 表現学会

日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』 大修館書店

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房

仁田義雄(1992)「判断から発話・伝達へ―伝聞・婉曲の表現を中心に―」『日本語教育』 77 号 日本語教育学会 pp. 1-13

平田真美(2001)「『カモシレナイ』の意味―モダリティと語用論の接点を探る―」『日本語教育』 108 号 日本語教育学会 pp. 60-68

藤崎博也・星合忠(1984)「言語表現の曖昧性」田中幸吉編『知識工学』朝倉書店 pp. 172-187

堀尾佳似(2004)「ぼかし言葉『～ミタイナ』について」『韓日言語文化研究』 第8集 韓・日言語文化研究所 pp. 179-202

益岡隆志(1991)『モダリティの文法』 くろしお出版

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法―改訂版』くろしお出版

三宅知広(1995)「カモシレナイとダロウ」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』 くろしお出版 pp. 52-63

森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』 くろしお出版 pp. 57-75

村田美穂子(1994)「ぼかし表現の新方向」『国文学解釈と鑑賞』vol.59 至文堂 pp. 119-126

〔韓国語〕

李水善(2008)「「～かも(しれない)」の意味機能考察」漢陽大学校大学院修士論文